

ギニアグラス新品種「ナツユタカ」

佐藤博保・*清水矩宏・**中川 仁 (九州農業試験場・*草地試験場・**熱帯農業研究センター)

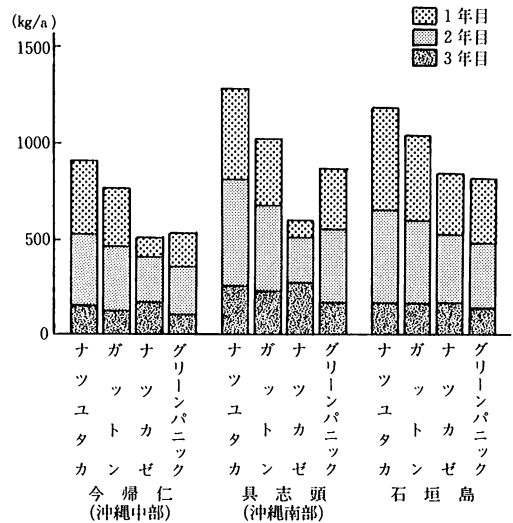
Hiroyasu SATO, Norihiro SHIMIZU and Hitoshi NAKAGAWA : New Registered Cultivar "Natsuyutaka" Guineagrass

ギニアグラスは我が国の暖地、亜熱帯に向く暖地型牧草で、1985年、暖地の耕地の1年生として利用する「ナツカゼ」を育成した。今回は沖縄等南西諸島の永年草地に向く「ナツユタカ」を育成したので報告する。

来歴及び育成の経過：アフリカ、米国、コロンビア等から導入した57系統を1980年に個体植えし、高取6系統から個体選抜し、14系統を九州農業試験場と沖縄県畜産試験場、熱帯農業研究センター沖縄支所で適応性及び諸特性の検定を行った結果、ナツユタカ（旧系統名九州5号）が最も優れた特性を示し、1988年に農林登録された。

特性の概要：生殖様式はほぼ完全な単為生殖で、系統内の遺伝的変異はない。中晩生に属し、5月上旬に播種すると8月下旬に出穂する。ナツカゼ等より3週間以上遅くなる。草型はやや開張し、草丈は高く、出穂時には2m以上に達する。葉は長く細い。葉部割合は高い。初期生育はガットン、グリーンパニックと同程度でナツカゼより劣るが、中期以後の伸長はナツカゼとほぼ同程度になる。刈取後の伸長は速やかである。収量は永年にわたり多収で安定している。沖縄での3年及び6年間にわたる多年利用による収量はグリーンパニックよりそれぞれ5割、3割、ガットンに対しては2割及び1割多収であった。また、永続性に優れ、裸地になる割合が少ない。また、沖縄各地の広い範囲の土壌条件にも良好な生育を示す。単年利用の収量はグリーンパニックより多いが、ナツカゼより劣る。栄養成分はガットン、グリーンパニックと差が少ない。乾物消化率はやや劣るが、可消化乾物収量は多い。種子生産は10a当たり20kg以上が期待できる。

適応地域と栽培上の注意：沖縄県及び鹿児島県を含む南西諸島で採草用として導入する。また、放牧にも利用できる。特にローズグラスより耐旱性に優れるので、夏期早ばつになりやすい沖縄県の八重山等の草地導入に好適する。線虫に対してはナツカゼと同様に抑制が期待され、輪作体系にも組み入れられよう。採種種子は休眠がある場合が多いので、休眠が覚めて良い発芽をする種子を使用することが肝要である。播種後の初期生育はやや遅く、雑草害をうけることがあるので、事前の除草には注意を払うことが望ましい。



第1図 沖縄3か所における3か年の乾物収量

第1表 ギニアグラス新品種「ナツユタカ」の特性

品 種	出穂日 月 日	稈長 cm	稈径 mm	葉長 cm	葉幅 cm	葉部 割合%	耐旱性	粗蛋 白質%	乾物収量 kg/a	赤 色 土 *		暗赤色土 *
										pH4.3	6.7	8.0
ナ ツ ユ タ カ	8.19	194	4.2	67	2.1	43.6	1.5	8.6	1984	25.1	22.3	14.9
ガ ッ ト ン	7.26	141	2.9	47	1.8	37.4	3.3	9.9	1776	27.4	20.4	16.7
ナ ツ カ ゼ	7.24	197	3.7	47	3.0	32.3	4.2	9.5	1525	19.2	19.6	16.6
グ リ ー ン パ ニ ッ ク	7.19	136	3.6	45	1.6	30.0	3.2	9.4	1561	20.5	18.3	16.5

注) 播種日：5月10日 耐旱性は1(強)、5(弱) 乾物収量は今帰仁(沖縄中部)の6か年合計

粗蛋白質は石垣島試験地における利用2年目(昭61)の3刈取期の平均

葉部割合は沖縄での5刈取の平均 *はポット試験で45日目の個体重(沖縄県畜産試験場)